TSUNAGU つなぐ

万機公論

NPO法人教育研究所理事長 牟田 光生

困窮者 見守り支える

むた・みつお　1977年横浜市生まれ。ＮＰＯ法人教育研究所理事長だった父親と共に、幼少期から不登校児と関わる。スポーツクラブインストラクターなどを経て、2005年に旧宇奈月町に移住。18年から現職。

昨年、今年と新型コロナによる打撃を全ての国民が受けた。中でも非正規雇用の人たちの被害は甚大で、解雇や契約満了の形で仕事をなくし、住居を追われるケースもあった。豊かな県と言われていた富山でもこのようなことが起きている。私たちの教育研究所では、低額宿泊所うなづきを設けて支援している。

昨年の利用者は例年の３倍強だった。内訳は就職氷河期世代が７割、持病を持っている人や児童養護施設の出身者、不登校経験者も多数いた。

教育研究所は元々不登校、ひきこもり支援をしている。加えて、派遣切りに遭った人や生活保護を受けている人の支援などを行い、その中で社会的な居場所のない困窮者のありようを考えさせられている。

また、私たちが運営する自立援助ホームに入所してくる子どもたちは、虐待や両親の離婚・死別など本人の意思に関係なく困難な状況に追い込まれる子が多く、精神医療とのつながりは不可欠だ。

私は幼い頃に母親が自殺した自死遺族として当事者の立場でもある。「たくさん構われるとうっとうしいが、ちゃんと見てるよ。頑張っている様子は知っているよ」と遠巻きに見守りながら、本人の気付きを促していく方法はひきこもりや生活困窮者にも有効な手法だ。

本年度、私は県の児童相談所機能強化検討委員に選ばれ、ＩＣＴ（情報通信技術）による子どもの専門家（保育士や先生、学童指導員など）の声をデータベースで蓄積し、問題が起こる前に子ども食堂や学習支援など民間ベースの支援につなげる案などを出した。

孤立と貧困が一番しんどい状態であり、そういった状況に陥った人たちが集まり、社会参加へ向けて宇奈月で合宿生活を送っている。孤立・貧困状態に陥らないためにもＩＣＴや社会の現状に合わせたセーフティーネットを考え、実行していかねばならないとの思いを強くしている。